

## 6 レタスパーティシリウム萎凋病 (新称) の発生

### ねらいと成果

2001年1月、淡路島でレタスの髓部(クラウン部分)が褐変する症状が発生し、原因を究明した結果、パーティシリウム属菌(*Verticillium* sp.)による土壌伝染性病害であることが判明した。この病害は日本では未報告であったため日本植物病理学会で発表し、「レタスパーティシリウム萎凋病」と呼称することを提案した。

### 内容

#### 1 病徴と被害(図1)

厳寒期の収穫時に下葉が黄化萎凋し、髓部を切ると導管に沿って褐変している。軽症では、褐変は髓部の片側に偏っているが、重症になると全体が褐変する。発病株が即被害株となり、出荷できない。

#### 2 菌の分離

クラウン褐変部と健全部の境界部分を約5mm角に切除し、表面殺菌した後、2%寒天培地において20℃で培養した。培地上に伸長した初め白色、後に黒色となる菌そうを呈する糸状菌を4菌株分離した。

#### 3 分離菌の病原性の確認

各菌株とも約 $10^6$ 分生子/mlに調整した分生子懸濁

液を、滅菌土壌で栽培した約10葉齢のレタス「サントス2号」の地際部の周囲にかん注して接種した。接種後は18℃の条件に保ち、接種11日後に病徴及びクラウン部の変色について調査し、4菌株すべてレタスに対し、萎凋及び導管褐変の症状が再現された(図2)。

#### 4 接種株からの再分離

1と同様の方法で再分離を行い、4菌株とも同一菌が再分離され、病原菌であることが証明された。

再分離菌の特徴は以下のとおりである。

①菌そうは白色のちに黒色

②1~数段のフィアライドを輪生する(写真3矢印参照)

③ジャガイモ煎汁乳糖寒天培地(PLA)上で容易に微小菌核を形成

④生育温度は5~27.5℃で、30℃で生育しない。

#### 今後の方針

伝染源を明らかにするため病原菌の正確な同定をするとともに、防除対策を検討していく。

神頭 武嗣(農業技セ・病害虫防除部)

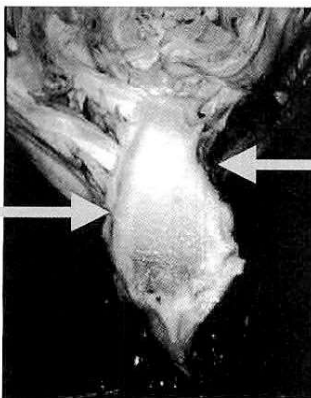


図1 レタスパーティシリウム萎凋病病徴(導管部の褐変)



図2 再現されたレタスパーティシリウム萎凋病病徴

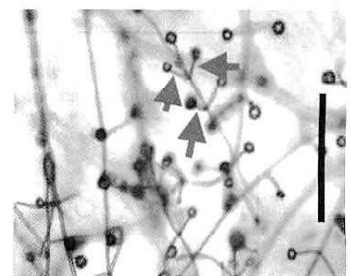


図3 PLA上の分生子柄と分生子塊(バー:200μm)